

2024 年度

教職課程 自己点検・評価報告書

東京神学大学

目次

1. 教育理念・学修目標	1
2. 授業科目・教職課程の編成実施	3
3. 学修成果の把握・可視化.....	8
4. 教職員組織.....	9
5. 情報公表.....	12
6. 教職指導（学生の受け入れ・学生支援）	14
7. 関係機関との連携	17

1. 教育理念・学修目標

(1) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定状況

具体的かつ明確な形で設定されているか

[1. 現状説明]

本学では、教員養成の目標と当該目標を達成するための計画を、「東京神学大学における教員養成の理念」及び「学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）」、「教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）」、「入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）」等を踏まえて具体的かつ明確な形で設定している [資料 1-1、1-2、1-3]。また、それを大学ホームページで公表し、とりわけ学生には『履修の手引』内の「教職課程の手引」、教職課程オリエンテーションで周知している [資料 1-4 及び 1-5]。

[2. 長所・特色]

教職課程オリエンテーションをはじめとしたプログラムにおいて、これらのエッセンスをわかりやすく説明する等、共有方法において工夫を行っている。

[3. 課題]

教職課程の理念・目的や養成すべき教員像は、教職課程を履修する学生には周知されるが、教職員には十分に浸透していない。

(2) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定プロセス

学生や採用権者の意見の考慮、所在する都道府県・政令都市教育委員会の策定する教育育成指標との関係性の考慮が行われているか

[1. 現状説明]

教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定プロセスにおいて、大学としての取り組みである「授業アンケート」「卒業時アンケート」により学生等の意見を考慮している [資料 1-6、1-7、1-8]。

非常勤講師のほとんどはキリスト教学校等での長い実務経験を持つ教員であり、その意見を考慮している。

[2. 長所・特色]

小規模大学の長所が生かされ、学生や採用権者との意見交換が緊密に行われている。

[3. 課題]

「授業アンケート」「卒業時アンケート」等、全学的に行っている取り組みがあるが、教職課程全体として改善・活用には至っていないため、運用面等の見直しを図りながら教職課程の質向上を検討する必要がある。

(3) 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の見直しの状況

一人一人の学生が教職課程での学修を通じて得た自らの学びの成果（以下「学修成果」という。）や自己点検・評価の結果、社会情勢や教育環境の変化を踏まえた適切な見直しが行われているか

[1. 現状説明]

学生が教職課程での学修を通じて得た学びの成果を、全学的な取り組みである「卒業時アンケート」により把握している。全学組織と教職課程運営委員会とが連携し、教職課程の在り方により良い改善を図ることを目的とした自己点検・評価を行い、教職課程の在り方を見直すことが組織的に機能している[資料 1-9]。また、教職課程関係法規の変更時に、教職課程運営委員会の下で、目標・計画の見直しを進めることによって対応している。Society5.0 に代表される社会の大きな変化のみならず、生徒指導提要の改訂など、教員養成をめぐる変化を踏まえ、計画の見直しを行う。「キリスト教学校伝道協議会」で教育現場の意見を聞く機会を設けており、さらに教育実習校との連携の中で、社会情勢や教育環境、教員採用等の実施状況の変化を踏まえた適切な見直しを行っている[資料 1-10 及び 1-11]。

[2. 長所・特色]

こども基本法の策定に伴い、本学教職課程が対象とする中高生が権利の主体として位置付けられたことにふさわしく、子どもの権利を大切にするキリスト教教育を担う教員養成に注力している。

[3. 課題]

教職課程教育を通して育もうとする学修成果について、ディプロマポリシーと連携しながら、可視化する余地がある。

<根拠資料>

資料 1-1 [「東京神学大学における教員養成の理念」](#)

資料 1-2 [「学位授与方針」「教育課程編成方針」「入学者受け入れ方針」](#)

資料 1-3 [「東京神学大学の特徴」](#)

資料 1-4 『2024 年度 履修の手引 神学部神学科』

資料 1-5 『2024 年度 履修の手引・学科目概要（シラバス）大学院神学研究科博士課程前期課程』

資料 1-6 [「東京神学大学 FD 委員会規程」](#)

資料 1-7 [「東京神学大学 授業アンケート 2023 年度前期～2025 年前期」](#)

資料 1-8 [「東京神学大学 2024 年度卒業時アンケート」](#)

資料 1-9 [「東京神学大学における教員の養成に係る組織」](#)

資料 1-10 「第 25 回キリスト教学校伝道協議会（伝道者・献身者奨励の会）プログラム」

資料 1-11 [「東京神学大学報」328 号（2024 年 7 月 19 日）](#)

2. 授業科目・教職課程の編成実施

(1) 全学的な教育課程の編成状況

複数の教職課程間における授業科目の共通開設は、開設に責任を負う学科等の強み・特色を生かしつつ適切に行われているか

[1. 現状説明]

本学は、神学部神学科のみの単科大学であり、福音主義のキリスト教に基づいて神学を研究し、キリスト教の教職を養成することを目的とする [資料 2-1]。ここで言う「キリスト教の教職」には、キリスト教会で奉仕する牧師、キリスト教病院・施設等で奉仕するチャプレンとともに、キリスト教学校における宗教主任、聖書科等の教師を含む。そのために「宗教科」の教育職員免許状取得のための教職課程を備えている。このように、本学の教職課程は本学の目的そのものに直結しており、全学的な教育計画の中で授業科目が編成されている。

[2. 長所・特色]

本学の学生は「キリスト教の教職」になるように神によって召されているとの召命感を抱いており、教育課程に取り組むことも、神への献身の具体的な形と受け止め、意欲をもって行っている。教職課程の授業科目もまた、その一環と位置付けられ、神の召しに応答するために必要な備えとして取り組まれている。

[3. 課題]

教職課程の授業科目のうち、いくつかの科目の担当を非常勤講師に委嘱している。現在は適切な講師を得ているが、それを継続することが将来的な課題である。

(2) 教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備の整備状況

ICT（情報通信技術）環境（オンライン授業含む）、模擬授業用の教室、関連する図書など、教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備が整備されているか

[1. 現状説明]

本館及び図書館において Wi-Fi によるインターネットへのアクセスが可能である。C 教室はコンピューター室として整えられている。図書館棟 2 階にラーニングコモンズが設置されている。プロジェクターによる映写、ビデオや DVD の視聴等ができる教室が 3 室あり、模擬授業で使用している。本学の図書館は神学研究のための図書館としては国内有数の規模があり、教職課程関連図書も備えている。教職課程の授業科目の実施に必要な施設・設備は十分整備されている。

[2. 長所・特色]

学生数が 60 名ほどの小規模大学であるため、予算に限りがあり、最新の施設・設備というわけではないが、必要なものは備えている。

[3. 課題]

教職課程関連図書をさらに充実させていくことが課題である。

(3) 教育課程の体系性

法令及び教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と対応し必要な授業科目が開設され適切な役割分担が図られているか、教職課程以外の科目との関連性が適切に確保されているか

[1. 現状説明]

法令と逐一照らし合わせながら授業科目が開設され、適切な役割分担が図られている。教職課程科目は、学校での働きだけでなく、教会での働きにも資するものであり、同様に教職課程以外の科目も、学校教育における教科に関する専門性を高めるものであって、両者は将来の「キリスト教の教職」としての働きに必要な準備として深く結びついている。

[2. 長所・特色]

非常勤講師を含め、全ての教員がキリスト者であり、本学が「キリスト教の教職」の養成にあたっていることをよく理解し、学生が将来、学校と教会の双方に仕える伝道者となることを常に念頭に置きながら教育活動を行っている。

[3. 課題]

なし

(4) ICTの活用指導力など、各科目を横断する重要な事項についての教育課程の体系性

教員として身に付けることが必要な ICT 活用指導力の全体像に対応して各科目間の役割分担が適切に図られているか、到達目標や学修量が適切な水準となっているか

[1. 現状説明]

ICTの活用については、授業科目「教育の方法と情報技術」が扱っており、その他の科目による役割分担は行われていない。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

聖書科授業は「聖書」という文書に時間をかけて取り組み、丁寧な読解を行うことを中心とするため、ICTの利用がなじまない面がある。とはいえ、教育の方法としてICTを活用する力を身に付けることは必要不可欠なことである。「教育の方法と情報技術」以外の授業科目においても、それぞれの科目の特色を生かしつつICTに触れる部分を設け、役割分担をしていかなければならない。

(5) いわゆるキャップ制の設定状況

1 単位あたりの学修時間を確保する上で有効に機能しているか

[1. 現状説明]

本学学部では、一年間に履修登録できる卒業要件科目の単位数を「50 単位未満」と定めている [資料 1-4]。しかし、ここには教職課程科目は含まれていない。そのため、教職課程履修者は履修科目が多くなり、1 単位当たりの学修時間を十分に確保できなくなる場合もある。

[2. 長所・特色]

本学の教育課程は「キリスト教の教職」として働くために必要な知識・技能を身に付ける職業訓練の性格を持っている。教職課程科目も同様である。全ての科目が同じ目的に向かっており、科目相互の結びつきが強く、一つの科目の学修が他の科目の理解を助けることになる。そのため、科目数が増えても、学修に際しての負担が単純に増えるわけではない。

[3. 課題]

本学は3年次からの編・転入学者が多く、履修科目数が多くなりがちである。教職課程科目を含めて履修科目の総数が多くなりすぎていないか、学修時間が十分に確保できているかを、より丁寧に把握する必要がある。問題があれば、教職課程科目も含めた単位数の制限を検討しなければならない。

(6) 教育課程の充実・見直しの状況

学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか

[1. 現状説明]

教職課程のみの学修成果を確認することはなされていない。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

今後、教職課程運営委員会が学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて、教育課程の充実を図り、また見直しを行わなければならない。

(7) 個々の授業科目の到達目標の設定状況

法令、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画、学習指導要領及び教職課程コアカリキュラムへの対応が図られているか

[1. 現状説明]

教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画に即する形で、個々の授業科目の到達目標が設定されている。また、宗教科には学習指導要領がないが、「特別の教科 道徳」の学習指導要領の内容に注意を払い、さらに、法令、教職課程のコアカリキュラムに対応しつつ、それぞれの到達目標が設定されている。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

なし

(8) シラバスの作成状況

教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等が明確に記載されているか

[1. 現状説明]

シラバスに「教職課程における要件・区分等」の項目が立てられ、その科目が教職課程全体の中でどの位置にあるかが明示されている。さらに、授業科目のテーマと到達目標、授業の概要と毎回の計画、成績評価の方法と基準、フィードバックの方法の項目が設定され、どの授業においても丁寧な記述がなされている [資料 2-2 及び 1-5]。準備学修等の指示は記載されているが、事前学修の指示が多く、事後学修には触れていない科目がある。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

「準備学修等の指示」を考える際に、事後学修についても考慮するよう、授業担当者に働きかけることを考えたい。

(9) アクティブ・ラーニングや ICT の活用など新たな手法の導入状況

授業科目の到達目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングや ICT を活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われているか

[1. 現状説明]

本学は、学生数が 60 名ほどの小規模大学であり、一つの授業科目の受講者は数名から 10 名程度であるため、つねに少人数であり、多くの授業科目においてアクティブ・ラーニングが行われている。ICT はあまり用いられていない。

[2. 長所・特色]

受講者が少人数であるため、一回の授業内で受講者の全員に複数回の発言を求めることが可能である。一人一人が自ら考え、考えたことを言語化し、他の人の発言を聞いて自分の考えを深めるための工夫が多くの授業でなされている。

[3. 課題]

ICT を活用した新たな手法は導入されていない。

(10) 個々の授業科目の見直しの状況

学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われているか

[1. 現状説明]

教職課程のみの学修成果を確認することはなされていない。個々の授業科目の見直しも行っていない。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

今後、教職課程運営委員会が学修成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて、個々の授業科目の見直しを行わなければならない。

(11) 教職実践演習及び教育実習の実施状況

教職課程において特に重要な役割を果たす教職実践演習、教育実習は、事前指導・事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われているか

[1. 現状説明]

教職実践演習は、学校教育に長年携わった講師により、適切に行われている。教育実習は、事前指導・事後指導を丁寧に行うほか、実習校での実習中には担当教員が実習校の訪問を行い、実習校との連携の下、適切に行われている。

[2. 長所・特色]

教職課程履修者の過半数は、キリスト教の中学・高等学校の卒業生ではなく、自分の母校で教育実習を行うことができない。そのため、本学が首都圏の教育実習協力校に依頼をし、学生を教育実習生として受け入れていただいている。教育実習中に実習校を訪問するほか、それ以外にも協力校の教員と関係を持ち、教員養成を協働して行うように努力している。

[3. 課題]

なし

<根拠資料>

資料 2-1 [「学校法人東京神学大学寄附行為」](#)

資料 1-4 『2024 年度 履修の手引 神学部神学科』

資料 2-2 『2024 年度 学科目概要（シラバス）神学部神学科』

資料 1-5 『2024 年度 履修の手引・学科目概要（シラバス）大学院神学研究科博士課程前期課程』

3. 学修成果の把握・可視化

(1) 成績評価に関する全学的な基準の策定・公表の状況

成績評価基準に基づく評語と授業科目ごとに定められている到達目標の達成水準との関係等が明らかにされているか

[1. 現状説明]

全学的な成績評価基準を策定し、『履修の手引』に掲載している。A、A-、B、C、Dを評語とし、到達目標の達成水準との対応を定めている [資料 1-4 及び 1-5]。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

なし

(2) 成績評価に関する共通理解の構築

同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している場合に成績評価の平準化を図ることができているか

[1. 現状説明]

本学においては、学生数が少ないため、同一名称の授業科目を複数開講することはしていない。

成績評価については、共通評価指標が定められており、シラバスにも共通評価指標をどのように用いるか記載している [資料 2-2 及び 1-5]。

[2. 長所・特色]

共通評価指標によって、成績評価の平準化が図られている。

[3. 課題]

学生数が少ないため、共通評価指標の導入が成績評価の平準化にどの程度効果をもたらしたか、検証が困難である。また、共通評価指標に挙げられている要素が、教職課程の科目に適したものとなっているかどうか、検証が必要であろう。

(3) 教員の養成の目標の達成状況（学修成果）を明らかにするための情報の設定及び達成状況

教員の養成の目標の達成状況を明らかにするための情報が適切に設定されており、それがどの程度達成されているか、教職実践演習に向けた「履修カルテ」を適切に活用できているか

[1. 現状説明]

卒業時の教員免許状の取得状況や教職への就職状況等、教員の養成の目標の達成状況（学修成果）を明らかにするための情報については、大学ホームページにて公表している [資料 3-1]。

学生は、定期的に履修状況を確認するとともに、学修成果を「履修カルテ」に記入することとしている [資料 3-2]。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

なし

(4) 成績評価の状況

各授業科目の到達目標に照らしてできるだけ定量的又は定性的に達成水準を明らかにし、厳格に点数・評語に反映することができているか、公正で透明な成績評価という観点から達成水準を測定する手法やその配点基準があらかじめ明確になっているか

[1. 現状説明]

シラバスには成績評価基準を明記するように授業担当者に求めている。また、大学として共通評価指標を策定しており、それを使用して成績評価をするように、そしてそのことをシラバスの成績評価基準の欄に明記するように求めている [資料 2-2 及び 1-5]。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

なし

<根拠資料>

資料 1-4 『2024 年度 履修の手引 神学部神学科』

資料 1-5 『2024 年度 履修の手引・学科目概要（シラバス）大学院神学研究科博士課程前期課程』

資料 2-2 『2024 年度 学科目概要（シラバス）神学部神学科』

資料 3-1 [「卒業生の教員免許の取得の状況に関すること」「卒業生の教員への就職の状況に関すること」](#)

資料 3-2 『東京神学大学 教職課程 履修カルテ』

4. 教職員組織

(1) 教員の配置の状況

教職課程認定基準(平成 13 年 7 月 19 日教員養成部会決定)で定められた必要専任教員数を充足しているか

[1. 現状説明]

大学ホームページにて公開している「教員の養成に係る組織及び教員の数」に記載のとおり、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数を充足している [資料 4-1]。また、教育職員免許法施行規則第 21 条第 2 項に基づく変更届の有無について毎年度確認しており、届け出る際には教職課程における関係法令に基づき、必要な教員の配置状況と業績を確認し、教職課程認定基準を踏まえた適切な教員を配置している。教員の配置状況等について課題が生じた場合は、教職課程運営委員会にて、確認及び検討を行い、速やかに対処をしている。

[2. 長所・特色]

小規模大学の長所を生かし、配置された専任教員が協働体制を構築している。

[3. 課題]

後継者となる専任教員の養成、確保が必要である。

(2) 教員の業績等

担当授業科目に関する研究実績の状況、担当教員の学校現場等での実務経験の状況

[1. 現状説明]

担当授業科目に関する研究実績の状況、担当教員の学校現場での実務経験の状況等は適切であり、文部科学省における教職課程認定を受けている。担当授業科目に関する業績は、採用時や担当授業変更時に教職課程における関係法令に基づき、必要な業績を確認している。専任教員の教員業績は大学ホームページにて公表している [資料 4-2]。専任教員は研究者教員であるが、同時に牧師としてキリスト教学校の礼拝や修養会での教育活動を経験している。非常勤講師はキリスト教学校での豊かな経験を持つ実務家教員である。

[2. 長所・特色]

本学は神学の単科大学であるため、担当教員が全員キリスト教教育に携わっている。したがって教職課程は本学の教員養成の理念を体現する教師の姿を学生に体現する機会でもあり、学生は多様なロールモデルに触れつつ、教師像への理解を深めている。

[3. 課題]

非常勤講師についても、変更届の提出時のみではなく、継続して研究業績を積んでいるかを確認する仕組みの構築の検討が必要である。

(3) 職員の配置状況

教職課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できているか

[1. 現状説明]

教職課程を適切に実施するため、全学的な教職課程の総括・連絡調整を行う専門的な係を教職課程運営委員会に 1 名配置している。

[2. 長所・特色]

小規模大学の長を生かし、職員が教職課程履修者の状況をよく把握し、きめ細やかに適切な対応ができています。教員との協働体制が構築されている。

[3. 課題]

担当職員が1名であるため、負荷増大、休暇取得の困難、離職時の業務停止リスクが懸念される。業務手順の可視化、複数スタッフによる業務共有を検討する余地がある。

(4) FD・SDの実施状況

いわゆる教科専門の授業科目を担当する教員や実務家教員も含め、教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画への理解をはじめ教職課程を担う教員として望ましい資質・能力を身に付けさせるためのFD・SDが確実に実施されているか、適切な内容が実施できているか、実際に参加が確保できているか

[1. 現状説明]

本学ではFD委員会を置き、全学的なFD・SD活動を実施している [資料 1-6]。専任教員のFDとしては、毎年8月の特別教授会において研究倫理の確認と啓発を、また3月の特別教授会において大学院の研究指導を含めた教育に関するFDを行い、さらに適宜、大学のアドミニストレーションに関するSDを実施している。しかし、教職課程に特化したFDはこれまで実施されていない。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

教職課程に特化したFDの実施を検討してもよいかもしれない。

(5) 授業評価アンケートの実施状況

個々の授業科目の見直しに繋がるFDの機会を活用できるように、効果的な授業評価アンケートの作成・実施が行えているか

[1. 現状説明]

前期・後期それぞれ、FD委員会によって、専任教員は2つ、非常勤講師は1つの授業をランダムに選び、自由記述を含む授業アンケートを実施している。アンケート結果は担当教員に開示しており、専任教員については、そのアンケート結果に基づく授業改善計画の提出を求めている。また、個々の授業科目ごとのアンケート結果は公表していないが、自由記述を除く全ての調査項目について、全ての授業アンケートの総計を大学ホームページで公表している [資料 1-7]。

[2. 長所・特色]

授業アンケート結果によれば、ほぼ全ての授業について、授業が自らの召命に応える歩みの形成に役立ったかどうかとの問いに対し、ほとんどの学生が「大いに役立った」「ある

程度役立った」と答えており、伝道者として教育現場に遣わすという本学の教職課程の使命に適した授業となっていることが読み取れる。

[3. 課題]

授業アンケートの質問内容について、教職課程の改善に役立てられるような項目を入れることを検討してもよいかもしれない。

<根拠資料>

資料 4-1 [「教員の養成に関わる教員の数」](#)

資料 4-2 [「教員紹介」](#)

資料 1-6 [「東京神学大学 FD 委員会規程」](#)

資料 1-7 [「東京神学大学 授業アンケート 2023 年度前期～2025 年前期」](#)

5. 情報公表

(1) 学校教育法施行規則（昭和 22 年文部省令第 11 号）第 172 条の 2 のうち関連部分、教育職員免許法施行規則第 22 条の 6 に定められた情報公表の状況

法令に定められた情報公表が学外者にもわかりやすく適切に行えているか

[1. 現状説明]

大学ホームページ「情報公開」ページにて、法令に定められた情報を「教員養成に係る情報」として、不足なく掲載している [資料 5-1]。掲載内容については、毎年 5 月末日までに教職課程運営委員会にて確認した上で、原則として 6 月 1 日に更新している。

[2. 長所・特色]

閲覧者が教職課程に関する情報にスムーズに辿り着けるよう、「情報公開」ページ冒頭に「教員養成に係る情報」のアンカーリンクを設けている。掲載項目には、対応する条文番号も併記している。

[3. 課題]

表題とアンカーリンクを「教員養成に係る情報」としているため、教育職員免許法施行規則第 22 条の 6 に定められた情報であることが閲覧者に伝わりにくい可能性がある。教職課程に関する項目へ適切に案内できるよう、2025 年度以降、表現を見直すこととする。

(2) 学修成果に関する情報公表の状況

大学が必要な資質・能力を備えた学生を育成できているかどうかを、エビデンスとともに説明できているか

[1. 現状説明]

大学ホームページ「情報公開」に「教員養成に係る情報」の一項目として、「卒業生の免許状取得・就職状況」を掲載している [資料 3-1]。当該資料では、直近 3 年間の卒業生数・

免許状取得者数・教員就職者数を確認することができる。また、教員就職者に限らず、学生の具体的な就職先（赴任先）については毎年5月に発行される学報に掲載している〔資料 5-2〕。

なお、本学の教育職員免許状取得者は宗教という教科の特性上、私立学校への就職となるため、教員採用候補者選考試験に関する取り組みはなされていない。

〔2. 長所・特色〕

本学の特色として、学部1年次への入学者が少ない一方で、大学等や社会人としての経験を経てから牧師や聖書科教師を志すに至った3年次（または2年次）への編・転入学者が多いことが挙げられる。学生は、学部で4年間ないし2年間、博士課程前期課程では2年間の一貫教育を受けることになる。

そのような特色は、教職課程にも現れている。例えば、学部での一種免許状取得者は1年次からの入学者に限られるため、極めて少数であり、学部卒業時の就職者は0名である。しかし、博士課程前期課程に進学し、「教科及び教科の指導法に関する科目」を修得した上で、一種免許状を上申することにより、専修免許状取得に至っている。一方、3年次への編・転入学者の多くは、一種免許状の取得要件を満たさないまま博士課程前期課程に進学することになる。進学後は、「教科及び教科の指導法に関する科目」だけでなく、科目等履修生として学部の教職課程に係る単位をも修得した上で、大学院修了時には専修免許状を取得することができる。教員就職者数は決して多いとは言えないが、キリスト教学校教育同盟に加盟する中学校が99校、高等学校が78校であり（2024年5月1日現在）、就職先が少数であることを鑑みれば、たとえ数年に1～2名であっても、修士レベルでの学びを終え、牧師としての働きも担える聖書科教師を送り出すことは、本学の大切な使命の一つであると言える。

また、大学院修了時には教会に赴任した者が、数年後、キリスト教学校で非常勤講師に任用されるケースも多く、教員就職者数に表れないながらも、取得済みの教育職員免許状を生かすことができている。

〔3. 課題〕

なし

〔3〕教職課程の自己点検・評価に関する情報公表の状況

根拠となる資料やデータ等を示しつつ、わかりやすい自己点検・評価の評価書を公表することができるか

〔1. 現状説明〕

教職課程の自己点検・評価については、教職課程運営委員会が中心となり、「教職課程に関する自己点検・評価の実施方針」に基づき実施している〔資料 5-3〕。大学ホームページには、当該方針及び『教職課程 自己点検・評価報告書』を掲載している。

〔2. 長所・特色〕

根拠資料に大学ホームページへのリンクを設ける等の工夫をしながら、わかりやすい『教

職課程 自己点検・評価報告書』の作成・公表に努めている。

[3. 課題]

教育職員免許法施行規則第 22 条の 8 に定められた情報であることを明記していないため、2025 年度以降、掲載方法を再検討する。

<根拠資料>

資料 5-1 [「教員養成に係る情報」](#)

資料 3-1 [「卒業者の教員免許の取得の状況に関する事」「卒業者の教員への就職の状況に関する事」](#)

資料 5-2 「東京神学大学報」327 号（2024 年 5 月 10 日）

資料 5-3 [「教職課程に関する自己点検・評価の実施方針」](#)

6. 教職指導（学生の受け入れ・学生支援）

(1) 教職課程を履修する学生の確保に向けた取組の状況

教職課程に関する積極的な情報提供の実施ができているか、教員の養成の目標に照らして適切に学生を受け入れているか

本学は牧師を養成することを目的としているが、キリスト学校における聖書科教師を志す人たちも受け入れている。学校案内では 1 ページを割き、「キリスト教学校の伝道者を養成」として、本学の教職課程の特長を紹介している [資料 6-1]。

今年度は、より多くの人に本学の教職課程を知ってもらえるよう、募集活動の一環として「教職課程のしおり」の作成が決定した。

入学後は、新入生を対象に教職課程オリエンテーションを実施しているほか、全学生に配付される『履修の手引』に「教職課程の手引」を含めており、修得すべき授業科目・単位数の情報はじめ、介護等体験や教育実習を含めたスケジュールも明示している [資料 1-4 及び 1-5]。

[2. 長所・特色]

多くのキリスト教学校は、聖書科の授業を受け持つ一教師としてだけでなく、学校礼拝やキリスト教行事の責任を負い、生徒や教職員、保護者の牧会をする、牧師としての働きができる教師を求めている。そのため、本学では単に資格を取得した教師ではなく、教会と同じようにキリスト教学校にも、福音を伝える伝道者を養成し派遣することを大切にしており、そのことは学校案内でも紹介している [資料 6-1]。

また、学部の編入学生選抜合格者及び博士課程前期課程の入学学生選抜合格者には、合格通知証等とともに「教職課程についてのご案内」を送付している [資料 6-2]。当該通知により、免許状取得を志す者は前在籍大学等から「学力に関する証明書」を取り寄せておくことができ、入学後のスムーズな履修登録に繋がっている。

[3. 課題]

本学は大学であると同時に日本基督教団立の神学校でもあり、「日本基督教団の牧師を志す人のための学校」として知られている。そのため、さらに一步踏み込んだ情報として、日本基督教団以外の教派・教会に属する人たちにも開かれており、聖書科の教育職員免許状を取得できることを、より積極的に周知していく必要がある。次年度に向けては、「教職課程のしおり」の完成にとどまらず、その後の活用方法等について検討しなければならないだろう。

(2) 学生に対する履修指導の実施状況

必要な体制や施設・設備を整えた上で、個々の学生の教職に対する意欲を踏まえつつ、学生に教職課程の履修に当たって学修意欲を喚起するような適切な履修指導が行えているか、「履修カルテ」を適切に活用できているか

[1. 現状説明]

本学では、3年次編・転入学者に対しては4月はじめに、1年次入学者に対しては7月下旬に、それぞれ教職課程オリエンテーションを実施している。その上で、免許状取得を志す学生は「教職課程登録票」を提出する。しかし、この機会を逃してしまった場合や、在学中に教職課程の履修を開始する場合には、個別に履修指導をする等、柔軟に対応している。

教職課程の履修相談については、担当職員が日常的に応じており、必要時には教職課程担当教員とも情報共有をする等、個別の事情に沿った指導が行き届いている。

教職課程履修者は、教職課程における自己評価を「履修カルテ」に記入することとなっており、「教職実践演習(中・高)」担当教員が学生個々の状況を確認している[資料3-2]。

[2. 長所・特色]

入学年次に応じた教職課程オリエンテーションを実施しているのが特長である。特に、3年次編・転入学者の場合、前在籍大学等での単位修得状況により、本学で修得すべき単位が異なるので、履修登録にあたっては担当職員が個別に履修指導をしている。

教職課程の単位修得状況については、学生本人が自己責任において管理すべきことであるものの、4月の基礎登録を終えた時点で履修登録をしておらず、免許状取得が見込めない場合に限り、担当職員が当該学生に連絡し、単位修得状況ならびに履修登録科目を確認した上で補充登録期間(履修登録科目の追加・取消のできる期間)に手続きをするよう注意喚起している。教職課程履修者数が決して多くはない本学だからこそ、このような個別指導が可能であると言える。

[3. 課題]

「履修カルテ」については、2024年度から「教職実践演習(中・高)」担当教員が交代になったこともあってか、十分に活用できていなかった。次年度以降は、個々の課題の確認に役立て、担当教員から適切なフィードバックができるよう、体制や活用状況を見直すよう努めることとする。

(3) 学生に対する進路指導の実施状況

学生に教職への入職に関する情報を適切に提供するなど、学生のニーズに応じたキャリア支援体制が適切に構築されているか

[1. 現状説明]

入学者選抜における面接にあたり、本学の志願者は召命感を問われ、おのずと卒業後の進路として、教会とキリスト教学校のどちらをより強く希望しているについても述べることになる。面接は教授会メンバー全員により行われるため、特任教授と助教を除く全ての専任教員が、学生一人一人の進路希望を把握している。進路相談については、各学年の専任教員が応じているが、聖書科教師を志す学生からの相談に関しては、特に教職課程運営委員会の教員が丁寧に応じている。

博士課程前期課程2年次の担任は、学長が務めることとなっており、修了後に向けての進路指導に当たる。学長は、学期はじめの担任面接の際、個々の学生の希望を確認し、教会やキリスト教学校からの依頼を踏まえて、任地を斡旋している。

新しい試みとしては、「教育制度論」の授業での公開講義が挙げられる。卒業生を招いての講義を公開したことで、既に当該授業科目を修得済みの学生や教職課程を履修していない学生も受講することができた。今後も、同様の取り組みを継続していく予定である。

[2. 長所・特色]

本学は小規模単科大学ゆえに、博士課程前期課程2年次の学生数も多くはない。学長が個別に複数回の面接をし、赴任先教会やキリスト教学校との折衝に時間を割くことができているのは、本学の長所でもあり、特色であるとも言える。

さらに、課外プログラムではあるが、キリスト教教育研究会の活動も特筆すべきこととして挙げられる。研究会の主な活動は現職教師との交流で、卒業生の協力により、首都圏のキリスト教学校を訪問、見学させていただきだけでなく、直接お話を聴いたり、質問したりする機会にも恵まれている。また、オンライン会議ツール（Zoom）を活用することで、遠方に住む教師との交流も実現している。このような活動を通して、学生はキリスト教学校への理解や、将来への意欲を深めることができる。顧問を教職課程運営委員長が務めていることも、きめ細かな進路指導に直結している。

[3. 課題]

なし

<根拠資料>

資料 6-1 『東京神学大学 学校案内 2024』

資料 1-4 『2024年度 履修の手引 神学部神学科』

資料 1-5 『2024年度 履修の手引・学科目概要（シラバス）大学院神学研究科博士課程前期課程』

資料 6-2 「教職課程についてのご案内」

資料 3-2 『東京神学大学 教職課程 履修カルテ』

7. 関係機関との連携

(1) 各学校法人との連携・交流等の状況

教員の採用を担う各学校法人と適切に連携・交流を図り、地域の教育課題や教員育成指標を踏まえた教育課程の充実や、学生への指導の充実につなげることができているか

[1. 現状説明]

本学を会場として、毎年キリスト教学校伝道協議会を開催している。全国のキリスト教学校から理事長、院長、校長、宗教主任、聖書科教員が集まり、学校の理念、教員の後継者問題、学校と教会の連携、授業力の向上等について協議している。2024年度は「キリスト教学校にとっての教会」を主題として、5月25日に開催された〔資料1-10及び1-11〕。

また、本学の教員がキリスト教学校の礼拝の説教者、修養会の講師として奉仕をし、その際に交流を持っている。各学校法人の現状や課題を知ることが教育課程の充実、学生への指導の充実に繋がっている。

[2. 長所・特色]

本学は学生数が少ないため、教員と一人一人の学生の関係が深い。そのため、学生が卒業し、各学校法人に勤めるようになってからも、本学教員との交流が継続し、学校間の交流の礎となっている。

[3. 課題]

本学の卒業生が勤めたことがなく、本学との関係が弱い学校法人とも、今後連携・交流を図っていきたい。

(2) 教育実習を実施する学校との連携・協力の状況

教育実習を実施する学校と適切に連携・協力を図り、実習の適切な実施につなげることができているか

[1. 現状説明]

すでに述べたように、教職課程履修者の過半数は、キリスト教の中学・高等学校の卒業生ではなく、自分の母校で教育実習を行うことができない。そのため、本学が首都圏の教育実習協力校に依頼をし、本学学生を教育実習生として受け入れていただいている。教育実習中に実習校を訪問するほか、それ以外にも協力校の教員と関係を持ち、教員養成を協働して行うように努力している。毎年ほぼ同じ協力校に実習を依頼しているため、連携・協力が深まっている。

[2. 長所・特色]

本学教員が教育実習協力校の指導教員と日頃から協力関係を持っており、毎年実習校の訪問、実習生の授業の見学、指導教員と共同での授業の振り返りと指導を行っており、綿密な連携・協力のもとで教育実習を行っている。

[3. 課題]

なし

(3) 学外の多様な人材の活用状況

学外の諸機関との連携の下、教育課程を充実するために学外の多様な人材を実務経験のある教員又はゲストスピーカーとして活用することができるか

[1. 現状説明]

本学の非常勤講師はキリスト教学校での豊かな経験を持つ実務家教員である。介護等体験のための事前の「特別講義」にも実務経験のある講師を学外から招いている。さらに、長山道教授が担当する「教育制度論」の授業に多様な人材を級講師として招いている。

また、すでに述べたように、課外プログラムのキリスト教教育研究会においても、キリスト教学校でのキャリアを有する現職教師との交流が実現している。

[2. 長所・特色]

なし

[3. 課題]

なし

<根拠資料>

資料 1-10 「第 25 回キリスト教学校伝道協議会（伝道者・献身者奨励の会）プログラム」

資料 1-11 [「東京神学大学報」328号（2024年7月19日）](#)